

「慰めに満ちた神」

Ⅱコリント1章4節

「神は、どのようなときにも、私たちに慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。」

暑い日々が続いています。9月になりましたが、昼間には真夏のような暑さが続いています。しかし、夕方には日差しが和らいで、さわやかな風が吹いているのを感じることができるようになりました。そして、そのさわやかさの中で、ほっとします。

このほっとする感覚が心地いいわけです。四つの季節の中で、「秋が好き」という方が多いようです。それは、暑い夏を過ぎて、ほっとする心地よさがある、過ごしやすい季節であるということが、1つの理由になっていると思います。

読書の秋、芸術の秋、食欲の秋、睡眠の秋とも言われます。快適に、落ち着いて過ごせる季節です。秋と聞くだけで、安心、安らぎ、平和、収穫、恵みというイメージを持ちます。

私たちは、ほっとする瞬間がないと疲れてしまいます。秋を迎えて、夏の疲れを取ることができるのと同じように、そしてまた、一週間がんばって、主日を迎えて、礼拝堂に入ってほっとするのと同じように。

礼拝堂に入ってほっとする。そこには神様の慰めがあります。

「神は、どのようなときにも、私たちに慰めてくださいます。」(Ⅱコリント1:4)
いつでも、どんな状況であっても、私たちは、主の御前に立つならば慰めを受けることができます。

私たちは、礼拝堂に座ってほっとしているでしょうか。私たちは、神さまからの慰めを受けているでしょうか。

私たちは、先週一週間はどのような歩みだったでしょうか。

暑さが続く中、あわただしく、あらゆることを思い煩い、ときに苛立ち、ときに悩み、ときに怒り、ときに不安になってしまうような、不安定な一週間だったのではないのでしょうか。

そんな私たちには、神さまの御前でほっとする時間が必要です。神様に慰められなければ生きていけません。

神さまに慰められている。そんな姿をイメージすると、旧約聖書のヨナの姿が思い浮かびました。

ニネベに行きなさいと、やりたくない仕事を神様に頼まれて、一度は逃げながらも、結局はニネベの町で、人々の滅びを宣べ伝えるという仕事をしました。そうすると人々は悔い改めて、滅びを免れました。

しかしそれは、ヨナの思い通りではなく、ヨナは不愉快になり、ヨナは怒りました。

そんなヨナに、主なる神様が唐胡麻の木を生えさせて、ヨナの頭の上を陰にして、ヨナの不機嫌を直そうとされたというのです。

物事が自分の思い通りにいかず、不機嫌になり、いらだつヨナに、日陰を備えて、落ち着かせようとする主なる神様がおられます。

自分勝手に不機嫌になっているにも関わらず、神さまが一方的に、慰めてくださるのです。

私たちはヨナのようなのです。

私たちは日々、神様からの務めを与えられていますが、やりたくない仕事、いやなこと、自分の思うこととは違うこともあります。

自分の段取りで一日を過ごしたい、自分の計画で一週間を過ごしたい。

でも、そんな風に上手く、思い通りに、日々の生活を過ごすことはなかなか難しいことです。

思いもよらぬことが起こるのが人生、思い通りにいかないことが当たり前、なぜならば、ヨナがそうであったように、自分の計画ではなくて、神さまのみこころがあるからです。しかし、そうすると私たちはイライラしてしまうことがあります。

そんな時、ヨナがそうされたように、主なる神様が私たちの不機嫌を直そうと、慰めてくださるのです。

Ⅱコリント1章4節

「神は、どのようなときにも、私たちに慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。」

どのようなときにも、私たちが自分勝手に不機嫌になって、どうしようもないときであつても、主が私たちに慰めてくださるのです。

そして、私たちは主なる神様からの慰めを受けるだけではありません。
主なる神様からの慰めを受けた私たちは、自分が神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができるということです。

慰められること知っている私たちは、慰めることもできるのです。私たちを通してさらに主なる神様の慰めが広がっていくのです。
あわただしい、せわしない世の中であって、私たちは、主なる神様の慰めを求め続けたいと思います。

神様の慰めは、どのようなときでも、そして、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます

苦しみというのは色々あるかと思いますが、「自分の思い通りじゃない」、「こんなはずじゃなかった」、「どうしてこんなこと」という苦しみがあります。
原因のわからない苦しみ、理不尽な苦しみです。

そしてまた、一方で、報われないという苦しみもあります。原因のわからない苦しみ
の一方で、結果の伴わない苦しみです。「こんなにかんがっているのに」、「自分はちゃんとしているのに」、「なんで理解してもらえないのだろうか」という苦しみがあります。

いずれにしても、根底には自分中心の考えがあります。こうなるはずだという、原因と結果の法則を自分で考えてそれに当てはまらないと苦しむことになるのです。
そして、そうであるならば、ああしよう、こうしようと、余計にもがき苦しむことになります。

そもそも間違っているにも関わらず、余計に一生懸命に自分の力でなんとかしようとしてしまうのが人間の持っている罪です。
そのような自分中心の苦しみから、解放し、救い出し、慰めてくださるのは神のみです。

Ⅱコリント1章4節

「神は、どのようなときにも、私たちに慰めてくださいます。」

しかし、イエス・キリストを知らなかった頃を私は、苦しみの中で、もっと頑張ろうと思いました。

なんでこんなに大変なんだろう、どうして不安なんだろう、もっと頑張らなければ、自分の力でなんとかしなければと、休むことができませんでした。
とにかく一生懸命でした。スポーツジムにも通って筋トレまでして、とにかく力をつけなければと必死になっていました。何かしなければ、気がすみませんでした。

そんな風にして、自分の力で、自分の人生、良い人生にしよう、人よりも力をつけなければと思いながら、イエス様を知らずに、なんとか心配や苦しみから逃れようと生きていました。

そして、ある日、横須賀のスポーツジムで、クリスチャンに出会い、導かれて、教会で、開いた聖書の箇所がマタイの福音書 11 章 38 節のみことばでした。

マタイの福音書 11 章 38 節。

「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

私は、イエス様の言葉に出会いました。私はそのとき、温かい手に触れられたような感覚で、ふっと力が抜けて、そしてほっとしました。不思議な感覚になったことを覚えています。

人生でこのときほど、力が抜けて、ほっとした瞬間はありません。

「もう頑張らなくて良いんだ」、「イエス様というお方がいるんだ」と、安心をしました。今思えば、まさに「慰め」を受けた瞬間でした。

「神は、どのようなときにも、私たちに慰めてくださいます」(Ⅱコリント 1:4)と、みことばを思い巡らしているうちに、そのとき、私は確かに「慰め」を受けていたんだと、今もう一度、思い返しました。

そのときから私は、自分の力で生きるという苦しみから解放されました。スポーツジムに通うよりも、土日は教会で過ごすようになりました。みことばを求めて、教会の交わりを求めようになりました。教会には慰めがありました。ちなみに、一度はやめた筋トレですが、健康のためにときどきはトレーニングをしています。自分の力に頼ってしまうという弱さはまだ残っているのかもしれませんが。

Ⅱコリント 1 章 4 節

「神は、どのようなときにも、私たちに慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。」

教会に通い続けながら、慰めを求めるだけでなく、この慰めを、まだ苦しみの中にある人達に伝えたいという思いが湧き出てきました。

そのうちに、土日だけでなく、毎日教会にいたいと思うようになり、祈りの中で献身へと導かれて行きました。

「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたを休ませてあげます。」(マタイの福音書 11:38) とのイエス様のことばを聞いて、慰めを受け、そして今まさに、「神は、どのようなときにも、私達を慰めてくださいます。それで私達も、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人達を慰めることができます。」(Ⅱコリント 1:4) とのみことばに生かされていることに気付かされ、神様のご計画に、アーメン、ハレルヤと驚きながらも、感謝しつつ、賛美の思いに満たされています。

私の人生、自分の計画ではなくて、神様の計画のうちに、今ここに立たされています。

主の素晴らしい計画を証しするために、主の救いと、慰めと、恵みを証しするためにここに立たされています。

あの時、主に出会い、慰められて、そして教会の礼拝の中で慰め続けられてきました。

もちろん、教会に通いながらも、日々の生活の中で疲れを覚え、思い煩い、神様のみこころを求めながらも、罪ゆえに自分の思いを捨てきれず、葛藤し、いらだち、不満を抱き、自分勝手な道を歩み出すようなこともありました。

しかしそれでも、あの時、私に触れた、温かい御手が、私を離さず、私をつかみ続け、私を引っ張り続けて、ここまで導かれ、なお慰めの中に生かされ続けています。

気が付けば、日曜日はもちろん、平日も喜楽希楽サービスでお昼の礼拝をささげられるめぐみに与っています。

毎日、教会で慰めを受けたいという祈りと願いが主に聞かれていたようです。

さらに、喜楽希楽サービスのご利用者の方々と共に礼拝し、一緒に時間を過ごしながら、「この慰めを、まだ苦しみの中にある人達に」という思いと祈りもまた、神様に聞かれ、今こうして喜楽希楽サービスの働きに加えられているのだと気付かされ、感謝と賛美があふれてきます。

イエス様の慰めによって、私は今生かされています。

もう自分に頼って強がる必要はありません。もう自分で何とかしようと一生懸命に頑張る必要はないのです。

私を慰めてくださるイエス様は言いました。「わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイの福音書 11:38)。むしろ、何もしなくていい。弱くていいのです。

私たちは、イエス様によって、理不尽な苦しみや報われない苦しみから解放されます。

「自分の思い通りじゃない」、「こんなはずじゃなかった」、「どうしてこんなこと」と、苦しむことがなくなるのです。

「こんなにがんばっているのに」、「自分はちゃんとしているのに」、「なんで理解してもらえないのだろうか」と、苦しみことがなくなるのです。

理不尽な苦しみ、報われない苦しみ、それは、旧約聖書のイスラエルの民のエジプトでの奴隷の姿です。

「自分の思い通りじゃない」、「なぜこんなことに」、「こんなにがんばっているのに」、「どうしたら苦しみから解放されるのだろうか」。

イスラエルの苦みの叫びを主なる神様が聞いてくださいました。

そして主なる神様がイスラエルの民を救い出し、解放し、慰めを与えられたのです。

神さまがイスラエルのために求めたことは、ただ主に信頼すること。ただ主を礼拝することです。

イスラエルの民が求めたのは苦しみから解放され、ただ主の御前に静まり礼拝することであり、主なる神様がイスラエルに求めたものも礼拝であったのです。

私たちも同じように、主を礼拝することを求めたいと思います。礼拝こそ慰めがあります。礼拝は解放であり、礼拝は救いであり、礼拝は慰めです。

しかし、その礼拝ができなくなるということがありました。

6月の水害でした。福祉館しおんが浸水し、デイサービスを休まざるをえなくなってしまったのです。1週間以上、デイサービスの礼拝が無くなってしまいました。

その後週3回からの営業を再開することになり、久しぶりの礼拝で分かち合った聖書の一節が、**Iコリント 10章 13節**でした。

「あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。」

共に集まり、共に礼拝をささげるということが当たり前ではないということを思い知らされたと同時に、再びこうして集まることができたという喜びに満たされながら、この一節を分かち合いました。

水害という試練、喜楽希楽サービスの営業が困難になり、建物の大きな修理をしなければならないという試練の中であって、このみことばが心にせまってきました。

試練の中にあっても、主に信頼し、主に導かれて歩いていこうと、共にみことばを分かち合いました。

必ず、脱出の道が備えられている。だから、前に進むことができる。希望があることをみことばによって励まされました。

水害だけでなく、私たちはそれぞれに、不安を抱え、体の弱さを覚え、色々な試練の中をなんとか生きています。

みことばを分かち合いながら、ご利用者の方々と心が通じ合ったように感じました。これまでなんとなく、ご利用者さんは介護を受ける側で、私たちは介護をする側といったような関係性に自然になっていたように思います。

しかし、水害を通して、私たちも試練の中にあるということ。私たちも助けが必要で、弱さを覚えていて、苦しんでいるということ。ご利用者と職員の区別なく、「私たち」になった気がしました。私たちは共に、試練を経験し、人生の中で弱さを覚えることがあり、助けが必要なことがあり、同じように苦しみを経験しています。自分の力でなんとかしようとしても、どうにもならないことがあります。それが私たちの本当の姿です。

私たちは、皆同じようにして、主の助けと救いと慰めが必要です。そして、共に慰めを求め、そして共に慰め合うことができる。

喜楽希楽サービスでの礼拝が、皆が一つとなって、一体となってささげた礼拝となった気がいたしました。

試練と思えるような出来事を通して、神様は慰めを与えてくださいました。

私たちは心を合わせて一緒に礼拝をささげることができるという慰めを与えてくださいました。

私たちは誰も慰めを必要としています。職員もご利用者の方々も、誰であっても区別なく、主の慰めが必要です。私たちは、共に慰めを受け、共に礼拝をして生きる存在だということを改めて教えられた経験でした。

Ⅱ コリント 1 章 3-4 節

「私たちの主イエス・キリストの父である神、あわれみ深い父、あらゆる慰めに満ちた神がほめたたえられますように。

神は、どのような苦しみのときにも、私たちに慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。」

クリスチャンになるまでは、自分の力でなんとかしようと、もがき苦しむという、苦しみがありました。

しかしそれだけでなく、クリスチャンに与えられる、苦しみや試練があります。それはクリスチャンになっても、なお自分の力、自分の思い、自分の計画という古い罪の性質が残っているということでもありますし、水害の後にささげた礼拝のように、苦しみの中で主なる神様の慰めを共に受けて、共に神をほめたたえる、さらに喜びが増し加えられるということもあります。

苦しみや試練は、私たちにとって共に神の恵みを覚える経験であり、そして感謝と賛美が生まれる経験にもなります。

私たちは試練の中にあって、「私たちの主イエス・キリストの父である神、あわれみ深い父、あらゆる慰めに満ちた神がほめたたえられますように。」(3 節) と祈りたいと思います。

主なる神様は、あわれみ深い父、あらゆる慰めに満ちた神です。そしてイスラエルの民を解放した神であり、救い主イエス・キリストを通して、私たちに救い出してくださいる神です。

そして、パウロが言いました。

「神は、どのような苦しみのときにも、私たちに慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。」(4 節)

パウロ自身たくさんの苦しみを経験し、そしてそれ以上の慰めを受けた人でした。苦難の経験を通して、主に望みを持つことを教えられ、確かに主の助けがあることを知り、そしてそのことを証しする人となりました。

Ⅱコリント 11 章 23-30 節にパウロの告白があります。

「彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうです。労苦したことはずっと多く、牢に入れられたこともずっと多く、むち打たれたことははるかに多く、死に直面したこともたびたびありました。

ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったこともあります。

何度も旅をし、川の難、盗賊の難、同胞から受ける難、異邦人から受ける難、町での難、荒野での難、海上の難、偽兄弟による難にあい、勞し苦しみ、たびたび眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さの中に裸でいたこともありました。

ほかにもいろいろなことがあります、さらに、日々私に重荷となっている、すべての教会への心づかいがあります。

だれかが弱くなっているときに、私は弱くならないでしょうか。だれかがつまずいていて、私は心が激しく痛まないでしょうか。

もし誇る必要があるなら、私は自分の弱さのことを誇ります。」

パウロはこれまでのたくさんの労苦を語りながら最後に言います。

「もし誇る必要があるなら、私は自分の弱さのことを誇ります。」

これがパウロの告白です。

自分の偉大さを語るのではなく、これまでの功績を自慢するのではなく、これまで経験した労苦と、自分自身の弱さを告白するのです。

そしてその告白の中に、主なる神様の栄光が輝くのです。

私たちの主イエス・キリストの父である神、あわれみ深い父、あらゆる慰めに満ちた神がほめたたえられるのです。

そのためにパウロは、苦難のただ中で経験した主の助けと励ましと慰めを、他の苦しむ者と分かち合うのです。ともに弱さを分かち合い、ともに苦しみを分かち合い、そしてともに、慰めに満ちた神をほめたたえるのです。

それが私たちの礼拝であり、教会の交わりであり、私たちが主にあって共に生きるということです。

今日、私たちは恵みの中に生かされています。
パウロは告白しました。

Ⅱコリント 12 章 9-10 節。

「しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。
ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいます。というのは、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」

私たちは今、共に生かされているのは、すべての困難を取り除いていただくためではなく、困難の中であって、共に神の栄光を現すためです。へりくだって、主を礼拝し、主の恵みを証しするためです。

Ⅱコリント 1 章 3-4 節

「私たちの主イエス・キリストの父である神、あわれみ深い父、あらゆる慰めに満ちた神がほめたたえられますように。
神は、どのような苦しみのおきにも、私たちに慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちに慰めることができます。」